

Pond
Of
Sarusawa

猿沢の池

VOL. 3

Table of Contents

序	1
一	3
二	5
三	7
四	9
後記	11

序

池と柳，その背景に五重塔 —この絵葉書を見ると，景色が奈良であり，池は猿沢池であると日本人なら無意識に呑み込む。それほど代表的な今では奈良を代表する象徴になっている。これら当時の興福寺境内の敷地は，現在では公園になっています。「赤鼻と竜」はその猿沢の池にまつわる昔から語り継がれている物語です。

むかしむかし、この国の都が奈良にあった時の話でございます。都のお寺の中で、それはそれは大きな鼻を持ったお坊さんがおりました。名を蔵人得業恵印(くらんどとくぎょうえいん)という名前なのですが、都の人々は誰もその名前で、お坊さんと呼んでくれませんでした。というのも、そのお坊さんの大きな鼻は人並み以上で、下唇辺りまで垂れ下がっていたのでございます。また、その垂れ下がった鼻の先が紅くなっていましたので、都中の人々は、お坊さんのことを「紅鼻の蔵人(くらんど)」などと言って、ニヤニヤ顔で話しかけてくるのが常でございました。

そういうわけでしたので、紅鼻の蔵人さんは毎日を悔しい思いで過ごしていたのです。今日も、鼻蔵さんはお寺の用事で街まで出かけたのですが、会う人・会う人や道行く人に笑われたり。子供にまで「わ~い、鼻蔵が通るぞー」って囃し立てられ、後を付いてこられる始末でございませぬ。用事を済ました鼻蔵さんはお寺へと戻るのですが、寺の近くに猿沢の池と言う満面に水を貯えた池がありました。この池の淵に立ち止まって休むのが鼻蔵さんの唯一の憩いでした。

池の水面をそっと覗くと、波うっている水面に、いつも大きくて長い紅い鼻の顔が映っているのです。何時も鼻蔵さんは、この長い鼻のお陰で幼い時から苛められてきたことを思い出すのでした。大人になっても、私はいじめられどうしだ。私がなにをしたと言うのだろう、お坊さんになって、人々が幸せに暮らせるようにと仏様に毎日拝んでいるのに。そう思うと、いっそう都の人々の仕打ちに悔しくてなりませんでした。

ある日の事です、この猿沢の池の縁に看板を立てかけられていました。— 五月五日この池より竜が昇るので危険です、当日は池の周りに近寄らないで下さい —と看板には書かれているのでした。さあ、それからと言うもの都の人々の噂は「竜が昇る」話しに夢中になり、誰も鼻蔵さんが通っても囃し立てる人もいませんでした。都の人々がひそひそと「竜が昇る」をわけありげに、此れは自分だけが知っている事だが.....等と話しているのを見るにつけ、鼻蔵さんは愉快でなりませんでした。

—自分が、悪戯で書いて猿沢の池の縁に立てかけた物を—それとは知らずに都中の人達が話題にしているとは。考える

だけでも鼻蔵さんは楽しくてしかたがありません。-猿沢の池より竜が昇るらしい-という噂が都から更に近隣の村々へとと広がり出しました。なにしろ地方から都へと行き来する人は沢山おりましたので、村へ帰る時の格好なお土産になりましたから。また、都の人達は朝昼なく猿沢の池を訪れては、池をそっと覗いては帰るのでした。

もう鼻蔵さんは面白く愉快でたまりませんでした。一人自分の部屋で笑ってばかりいました。もとより鼻蔵さんは蔵人得業恵印というお坊さんですので、朝昼夕のお祈りはかかせませんでした。都中の人々が竜が昇る噂をすればするほど、鼻蔵さんは以前と違って気持ち良く、仏様にお祈りを出来るようになりました。毎日毎日、鼻蔵さんは清々しい気持ちでお祈りできる自分を発見したのです。

日々の仏様へのお祈りが晴れ晴れしい心と、そうなると、何の雑念もなくお経を唱えられるようになった鼻蔵さんは生き生きとしたのでございます。自分がでまかせに書いて立てた-竜が昇る-を、まことしとやかに語る人々を見て鼻蔵さんは満足でした。私の事を見れば、赤鼻などと嗤し立ててクスクス笑う人々が、-竜が昇る-と真剣にこそこそと話す人々の仕草がおかしく面白く鼻蔵さんには見えたのでございます。

二

そうこうするうちに五月五日を迎えましたのでございます。まだ夜も明けない内から、一目で良いから一竜が昇るところを見たいと一都から遠く離れた村々に住んでいる人達も、猿沢の池に向かって家を出立するほどですので、都に住んでいる人々はなお更でございました。一竜が昇るところを見れるとは一先祖様へのお土産話しになると、老人たちも、これも日ごろの信心のおかげ、仏様の御利益とお経を唱えながら猿沢の池へと向かったのでございます。

中には野次馬もいましたのでございましょうけれど、猿沢の池へと人々の列が道幅一杯に続いたのでございます。もちろん、近所界限を誘った人々の輪の列なので、それはもう、騒々しい事は言うまでもないことです。

鼻蔵さんはあまりにも外が騒々しいので、こんな朝早くから何事かと障子を開けて外を覗きました。鼻蔵さんはもうびっくりしてしまいましたのです。道幅一杯に人々の輪が続いているではありませんか。これは、いったいどうしたのか。鼻蔵さん、つまり蔵人得業恵印は道行く人々を覗きながら考えてしまいましたのございます。

すぐに、原因は自分が立てた一五月五日この池より竜が昇ります一という立て札のせいだと蔵人得業恵印は知りました。一なんと、馬鹿な奴等だろう。あの立て札は、私が悪戯で立てたのに。そうとも知らずに、一竜が昇る一と信じて見に来るとは、鼻蔵さんは障子の内側から道行く人々の列を見ては、ニヤニヤと笑うばかりでした。

朝早く起こされました蔵人得業恵印は、いつもよりはやく朝の勤行を始めたのでございますが。仏様に祈っている間中でも道行く人の騒々しい音は途切れませんのですので、ふっと不安になりだしたのでございます。まさか、都中はもちろん遠く離れた近隣在所からも一竜が昇る一のを見物に来るなどと、蔵人得業恵印は思いも及びませんでした。

一何時頃、竜が昇るのか一とか、一天气が良いのだから、午後に昇る一、いや、昇るのは夕方である一とか、一池の真ん中から昇るはずだ一、一俺達も吸い込まれてしまうかも一、一立て札には、危険だから近寄らないで下さいと。書いてあったぞ一。などと、てんでに話しをしながら人の波が猿沢の池へと向かう様ですので、それはもう騒々しさは凄い物でした。

えらい事になってきた。と、鼻蔵さんは恐ろしくなって突然震え出したのでございます。もう、あの立て札は私が書いた悪戯ですと言う事など出来ない相談でした。蔵人得業恵印はだんだん顔色が青くなっていました。人々の輪は次から次へと-竜が昇る-猿沢の池へと波のように続いております。

-そうだ! -自分も見物に行けば、私が立て札を作ったなどと疑われずにすむと、蔵人得業恵印は思いつきましたのでございます。鼻蔵さんはさっそく坊主頭を風呂敷きで隠し、猿沢の池へと道行く人々の輪に加わりました。

猿沢の池の周辺は夜も明けないうちから、人々で黒山の様になっていました、お互いに押し合いながら、池の近くへ出ようと争いが至る所で起こっていました。池淵の最前列に陣取った人の中には、押されて池の中に落ちる人々も出る始末です。でも日が昇り夜が明けたのですが、青空に一つ二つと白雲が浮かんでいる快晴の天気でした。

-なに、直(じき)に荒れ模様になるさ。だいいち、風雨の凄まじい中を竜が昇っているのが絵に描かれているからな-。えらい事になってきた。と、鼻蔵さんは池に来たもののさらに恐ろしくなってガタガタと身体の震えは止まりません。もう、いまさら、あの立て札は私が書いた悪戯ですと言えない。蔵人得業恵印はさらに顔色を青くし人々の輪の中にいるしかありません。日が昇りつめても人々の波は次から次へと-竜が昇る-猿沢の池へと川のように続いております。

三

-そうだ、そうだ。こんなお日様が出ていて天気の良い日に昇る絵など無いからな-。そう言いあいながら黒山の人々は池の面をじっと睨んでいるのでした。鼻蔵さんは見に来たものの、自分の悪戯が大きくなってしまったから、身体の方がガタガタと震えておりましたが、こんどは、池を見つめているうちに不思議と震えが止まりました。そのうちに... ..ひょっとすると、これは... ..と鼻蔵さん自身も池から竜が昇るのを本当の事のように思えてきました。

一時間経っても、二時間が過ぎても池に映るのは、青い空とポックリポックリと流れている白い雲だけです。今か今かと池を見つめているうちに、とうとうお昼も過ぎてしまいました。それでも、青空には日様が眩しく、白い雲が浮かんでいる天気の良いことには変わりがありました。

お昼を過ぎた頃になると、さすがに、見物に集まってきた人々の中にも疲れも出てきたせいでしょう、天気も良く何の変化もない池に諦めて帰る人もちらほらと出てきました。

-おーい、これは悪戯じゃないのか、こんな良い日に竜が昇るはずがない-、-いやいや、えてしてこういうもんだ。あまり人が集まったので竜も昇るに昇れないでいるのだ-。残っている人々はそう言い合いながら池の面を、あいかわらず見つめているのでした。

そうこうして昼も過ぎた二時ごろ、熱心に池の面を見詰めていた黒山の人々も、竜が昇るのはやはり嘘だと思い始めていた時でございます。一陣の風が池を波立たせたのでございます-おお! これは! いよいよだ! 竜が昇る準備を始めたのだ-と。人々はひきつけられたように一心に池を出しました。誰一人として話しをするものもいませんでした。

気がつくと上空は黒い雲が太陽を隠して走るように広がってきていました。風はさらに強くなり池の面は更に高く波立ったのです。黒雲が濃くなり池をすっかりと覆ってしまいましたので、辺りは暗くなりだしました。黒山の人々は興奮し-いよいよだ! いよいよ! 竜が昇るぞと-と生唾のみこみながら、波が荒れ狂い出している池を一生懸命見つめていました。

雨がパラパラと降りてきたと思ったらいきなり激しさを増した降りになり、人々は「おお! 竜が雨を呼び出したぞ」と思い、雨が目に入らない様に、額に両手をやって池を一心に見つめて動かなくなりました。雷が響き稲妻が光り、池の表面はますます波立ちが狂い出すように渦巻き始め、見ている人々はびしょぬれながら竜が昇っていくのを待っていました。

一段と空に響き渡る雷音は大きく、稲妻の光りひっきりなしに辺りを青く照らし出し、風は激しさを増して吹き、池の水は更に高く波たって、人々は憑かれたように、竜の昇るのをいまかいまかと待っていました。

この時間も人々は池を見つめていたのでしょうか、それでも、竜は一向に現れる様子が有りません。そのうち、雨は止み出し黒雲も去ってしまい、空は徐々に青空に戻ってしまいました。風も止み、一心に見ていた人々は、わけもわからず、ポカンとしているだけです、やがて気をとりもどすと「ぶつぶつ」言いつつ池を後にしました。

ひと嵐が過ぎ去ったせいでしょうか、それとも、ひと暴れが済んだせいでしょうか、再び戻った青空は清く澄み渡ってありました。池もその周りの木々もお寺さんの塔も瓦も西日に燦然と輝いておりました。いつのまにか池には鼻蔵さんただ独りになっていました。気がつくとも鼻蔵さんは「五月五日この池より竜が昇るので危険です、当日は池の周りに近寄らないで下さい」と書いた立て札を引き抜いて細切れに壊していました。

かぶっていた風呂敷きでそれらの木片を石と一緒に結び付けると、蔵人得業恵印は池へと投げ入れたのです。これでもう、私がした悪戯だと誰も思うまい。西日を受けながら蔵人得業恵印は安堵しました。やがて、池を見つめながら蔵人得業恵印は集まった人々へ思いを込めるように題目を唱えました。どうか、仏様の御加護が有ります様にと念じつつ唱えていました。この時はまだ蔵人得業恵印は自分の変化に気が付かなかったのですが、でも、いつもと自分の心が違うことはわかりましたし、だいいちに身体が熱く感じてはいたのです。

四

蔵人得業恵印は自分の部屋に帰ってきてても、どうしても釈然ともしませんでした。常日頃とは何かが違った、あの池で唱えた時に感じたものは何だったのか掴めないでいたのです。蔵人得業恵印は仏様に向かって日課の念仏を唱えていて、はっとなりました。「これは、なんとしたことが!」私は! 蔵人得業恵印は驚愕してそのまま部屋の一点を見つめたままでした。

「南無妙法蓮華経」と蔵人得業恵印は意味の分からない言葉を唱えていたのです。それに、心にはあの池に集まった黒山の人々が彷彿しておりました。今までと違って、仏様の前でお題目を上げていた心境が、薄れている感じがしてなりません。意を強くして何かに強く打たれた感じでおりました。「仏様とは?」「西方浄土とは? 何の為に祈りが有るのか」。蔵人得業恵印は一点を睨んだまま石の様に動かないでおりました。

都の人々から-猿沢の池から竜が昇る-という噂もいつしか消え、忘れ去られてしまった頃、同じく鼻蔵さんが都からいなくなった事も、都の人々は気が付きませんでした。名を蔵人得業恵印と言う、大きな紅い鼻を持ったお坊さんの事も、その昔に鼻蔵と囃し立てていた事も都の人々は、もう、忘れてしまっていました。

それから時代が過ぎて、奈良の都は京都に移り、やがて、政治の中心が鎌倉に移って武士の時代になった時でございます。一人の僧が忽然と新しい法を人々に唱え始めました。「南無妙法蓮華経」と唱えなさい、仏様の国も従来のような仏様などいないのです。仏様は仏性に宿しているのです、仏性は皆さん一人一人が持っています。だから、「南無妙法蓮華経」と唱えて、あなたの仏性の中にいる仏様に一心に祈るのです。そうすれば自分自身の中にある仏性が現れて、人はみんな、悩みや苦しみや悲しみから救われます。あなたが仏に変わります。仏とはそう言うものなのです。

「南無妙法蓮華経」と一心に唱えるのです、そうすれば、心の中に生きている仏様が四辺に光り放ち出し、ひとは幸福になれるのです。「仏様の為の仏教でなく、人々全ての民衆の為の仏教が釈迦の教えなのです、これこそ仏教の真のあり方なのです」、一人のお坊さんが鎌倉の市中を唱えて歩

いていました。

後記

今日、「民衆による民衆の為の民衆社会こそが真の人間社会のあり方なのだ」との唱えは、民主主義の要望なのだろうけど、ではその構築はと唱えると多数決裁決を持ってして成り立つ。それ故に、少数意見者は破棄される。

社会をどの様に捉えるか？ 人の自由性をどう考えるか？ 人間もまた動物の一種属科の範疇であることは、過去の歴史から見ても歴然と証明している。

人はどうやって動物種族から分岐して生物種の人間として垂離を唱えているのが、もしかしたら宗教なのかも。

人間が動物種族科から垂離して行かないと、未来へと地球の外側へと宇宙の中で永続は出来ない。動物のまま留まっていたのなら地球から消滅していく生物体である。

